2024年8月25日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

古里へと帰る（その2）

［創世記35章1～15節］

神はヤコブに言われた。「さあ、ベテルに上り、そこに住みなさい。そしてその地に、あなたが兄エサウを避けて逃げて行ったとき、あなたに現れた神のための祭壇を造りなさい。」ヤコブは、家族の者や一緒にいるすべての人々に言った。「お前たちが身に着けている外国の神々を取り去り、身を清めて衣服を着替えなさい。さあ、これからベテルに上ろう。わたしはその地に、苦難の時わたしに答え、旅の間わたしと共にいてくださった神のために祭壇を造る。」人々は、持っていた外国のすべての神々と、着けていた耳飾りをヤコブに渡したので、ヤコブはそれらをシケムの近くにある樫の木の下に埋めた。こうして一同は出発したが、神が周囲の町々を恐れさせたので、ヤコブの息子たちを追跡する者はなかった。ヤコブはやがて、一族の者すべてと共に、カナン地方のルズ、すなわちベテルに着き、そこに祭壇を築いて、その場所をエル・ベテルと名付けた。兄を避けて逃げて行ったとき、神がそこでヤコブに現れたからである。リベカの乳母デボラが死に、ベテルの下手にある樫の木の下に葬られた。そこで、その名はアロン・バクト（嘆きの樫の木）と呼ばれるようになった。ヤコブがパダン・アラムから帰って来たとき、神は再びヤコブに現れて彼を祝福された。

神は彼に言われた。「あなたの名はヤコブである。しかし、あなたの名はもはやヤコブと呼ばれない。イスラエルがあなたの名となる。」神はこうして、彼 をイスラエルと名付けられた。神は、また彼に言われた。「わたしは全能の神である。産めよ、増えよ。あなたから一つの国民、いや多くの国民の群れが起こり あなたの腰から王たちが出る。わたしは、アブラハムとイサクに与えた土地をあなたに与える。また、あなたに続く子孫にこの土地を与える。」

神はヤコブと語られた場所を離れて昇って行かれた。ヤコブは、神が自分と語られた場所に記念碑を立てた。それは石の柱で、彼はその上にぶどう酒を注ぎかけ、また油を注いだ。そしてヤコブは、神が自分と語られた場所をベテルと名付けた。

[1] 私たちは、礼拝に帰って行く

一私たちは何のために教会に来ているのでしょうか？「それは決まっているではないですか。礼拝をするためです」と言われると思います。本当にそうです。特に日曜日は、本当に一週間の初めの日として神様の前に出るということ、そこから一週間を始めることが習慣に出来るということは幸いなことだと思います。しかし、「礼拝に行く」という行為は、一面確かに「私たちの側」の行為な訳ですけれども、この礼拝行為が可能になるためには、まず「神様の側」からの語りかけがある、みわざがあるからこそ、ですよね。それが私たちの「原点」になっている。その意味では私たちは「礼拝に行く」と言うよりも「礼拝に帰っていく」という方が正確ではないかと思います。そして、これまでずっと見て参りましたヤコブの生涯が私たちに語ることも、そのことなのではないかと思いました。

　先週は33章で、ヤコブが、双子の兄エサウと20年ぶりに再会し、最初はその再会を恐れていたヤコブでしたが、エサウの方は、地に七度もひれ伏しながら自分に近づいてくる弟を、何も言わずに抱き締め、口づけし、共に泣いたという感動的な出来事を味わいました。本当に素晴らしいシーンです。それで物語は終わったように思ってしまうのですが、まだ続きがありました。今日は35章ですが、その1節にこのようにありました。「神はヤコブに言われた。「さあ、ベテルに上り、そこに住みなさい。そしてその地に、あなたが兄エサウを避けて逃げて行ったとき、あなたに現れた神のための祭壇を造りなさい」」。―兄とヤコブは和解したのですけれども、ヤコブはまだ完全に古里（故郷）に帰ってはいないのです。33章の最後を見ると彼はどういう訳か、古里への途中と言って良いカナン地方・シケムの町に留まって、そこで土地を買い、祭壇も立てた、と書いてあるのです。土地も買ったというのですから、もうそこに住む気満々ですよね。しかしそこは彼が最初に神様の声を聴き、また自らも「ここに祭壇を立てる」と宣言した場所ではないのです。それは、28章に書いてあります「ベテル」という場所でした。そこで神様はヤコブに現れてこう言ったのですね。28：13～。「主が傍らに立って言われた。「わたしは、あなたの父祖アブラハムの神、イサクの神、主である。あなたが今横たわっているこの土地を、あなたとあなたの子孫に与える。あなたの子孫は大地の砂粒のように多くなり、西へ、東へ、北へ、南へと広がっていくであろう。地上の氏族はすべて、あなたとあなたの子孫によって祝福に入る。見よ、わたしはあなたと共にいる。あなたがどこへ行っても、わたしはあなたを守り、必ずこの土地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを果たすまで決して見捨てない」。これがハランに逃れて行ったヤコブに対しての「神様の方から」のお約束でした。ヤコブはどれだけ力づけられたことか。そして、ヤコブの方も神様に誓願を立てたのです。28:20～。「神がわたしと共におられ、わたしが歩むこの旅路を守り、食べ物、着る物を与え、無事に父の家に帰らせてくださり、主がわたしの神となられるなら、わたしが記念碑として立てたこの石を神の家とし、すべて、あなたがわたしに与えられるものの十分の一をささげます」 。その場所こそ、彼自身が「ベテル（神の家）」と名付けた、言ってみれば、「聖なる地」だったのです。ところが、彼はいつしかそのことを忘れてしまった。

[2] 主を畏れよ！

　それに対して、神様はヤコブを裁くことは致しません。しかし、語りかけたのです。35:1―「さあ、ベテルに上り、そこに住みなさい。そしてその地に、あなたが兄エサウを避けて逃げて行ったとき、あなたに現れた神のための祭壇を造りなさい」。ヤコブが忘れていたとしても、神様の方が覚えているのですね。ある意味恐いです。私たちの発する言葉は皆神様に届いている。ごまかしは利かない。ヤコブもこの時、ハッとしたのでしょうね。「ハッとする」。これが悔い改めなのかもしれない。私はそう思いました。神様は「さあ、ベテルに上り、そこに住みなさい」と言ったのですが、他の訳ではここを「立って」ベテルに上り、と訳しています。私たちはもしかすると、信仰生活が‟自分基準”になって座り込んでしまうということがあるではないかと思います。自分自身でもどこかそのことに気が付いている。そんな時に神様は怒るのではないけれども、私たちの背中を押すことがある。「さあ、立ってあなたのベテルに行きなさい」。これは体の問題ではないと思います。心の方向転換です。内向きになっていた眼を、神様の方に向けるということ。

　週報にもご紹介した文章なのですけれども、今日のメッセージを準備する中でこの文章に出会って、自分自身に言われたような気がしましたので、ここでも読ませて頂きたいと思います。E・H・ピーターソン著『聖書に生きる366日 一日一章』（ヨベル社）からの言葉です。

「主を畏れよ。「わたしたちが神を信じるのかどうか」については、聖書は興味を示していない。聖書においては、「程度の差こそあれ誰でも神を信じている」を前提としている。「神への応答」に聖書は関心を寄せている。わたしたちは神を「神ご自身」として、尊厳と聖性を帯びた存在として壮大で驚嘆すべきお方として考えていないだろうか。それともわたしたちは神を常に「わたしたちの思いの枠内」に収まるように矮小化していないだろうか。「自分の居心地のよい枠内」に閉じ込めようと努力していないだろうか。わたしたちのライフスタイルに合うイメージだけで神を考えてはいないだろうか ?もしそうであるならば、わたしたちは「創造者である神」や「十字架のキリスト」と向き合っていない。自分達の想像で作り上げられた程度のものと向き合っているのだ。偉大な神との関係において、以上のような冒瀆的 (友達レベルの)親交関係へと陥らないために、聖書は、主への畏れを言及している。これは、わたしたちを怯えさせるためではない。圧倒させられる神の壮大さの御前で畏敬の念をもって神を見つめさせるためである。わたしたちの泣き言と愚痴を黙らせ、むやみに走り回ったり、くよくよしているのを止めさせ、神の本当の姿を見、語られる、慈しみ深く、人生を変える神の赦しの言葉に耳を傾けることができるためである。

神の然りに 畏れを持って立て！

ああ、神を畏れる者は  何と祝福されていることだろうか !　詩編 128:4」。

ヤコブも、あのベテルで初めて神様の御声を聴いた時、「ここは何と畏れ多い場所だろう。ここはまさしく神の家である。そうだ、ここは天の門だ」（28:17）と、感動して言ったのです。私たちが礼拝を捧げるということは、その感動を新たに取り戻すことではないでしょうか。ピーターソンは、ちょっと皮肉っぽく、「友達レベルの神様ではない」という様なことを書いていましたが、でも本当にそうですね。友達はもしかしたら離れていくことがあるかも知れませんが、神様は友以上の方です！この主は、私に代わって十字架でご自身を投げ出して下さったお方ではないですか！そしてこのお方は、私たちを、永遠に手離すことはなさらないし、毎日、私たちが聞く耳さえ持っていれば、御言葉を与えて下さる生けるお方です。

[3]　初めの愛に立ち帰り続ける

ヤコブ達の父親のイサクも35章の最後で葬られています（あのエサウと一緒に葬りをしています！）。また8節にはリベカの乳母デボラも亡くなり、ベテルの下手にある樫の木の下に葬ったとありますから、リベカももう亡くなっていたのかもしれません。またヤコブの愛する妻のラケルもベニヤミンを産んで亡くなり、ベツレヘムへ向かう道の傍らに葬ったと書いてあります。人間の寿命は限りがあるのです。そういう現実を描きながら、その私たちの生涯を慈しみ、支え、声をかけ、救ってくださる主なる神様のリアリティーを創世記は語ってくれています。「私たちが神を愛したのではなく、神がまず私たちを愛して下さった」。その「初めの愛」にいつも新しく立ち返って行きたいと思います。2節で「身を清めて衣服を着替えなさい。さあこれからベテルに上ろう」とヤコブが言ったように、私たちも、神様との個人的な祈りの中で主に向き直る時に、新しくされ続けて行くのだと思います。これからも命ある限り、「渇いている者は、誰でもわたしの所に来て飲みなさい」（ヨハネ7:37）と招いていて下さる主の許に、ご一緒に進み出たいと思います。お祈り致します。

主なる神様、今日もあなたの御前に進み出ることが出来て、ありがとうございます。いえ、それ以前にあなたが私たちに目をとめ、出会って下さっているのです。愛を注いでいて下さっているのです。その愛は、私たちがまだ罪人であった時にイエス・キリストを与えて下さることによって、完全に確かなものとなりました。ありがとうございます！どうか、毎週、あなたからの決して渇くことのない「あまつ真清水」を慕い求め、それを頂き続けて生きて行くことが出来ますように。まだ暑い日が続きますが、どうか、私たち一人ひとりの霊肉を強め、支えて下さいますように。主イエス・キリストのお名前によって祈ります。アーメン。